The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「反復者」を再生産する社会メカニズム : 「アジア解放」思想における大川周明の「忘却」
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2013, 2012, p. 5-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「反復者」を再生産する社会メカニズム

——「アジア解放」思想における大川周明の「忘却」——[1]

伊勢　芳夫

1.「反復者」とは

日常化されている事象について疑問を感じるのは、ある種の「天邪鬼さ」が必要なのかもしれない。それが言語による知識や価値観の刷り込みという現象になると、言語によって「考える」のであるから、われわれが教え込まれた(刷り込まれた)知識や価値観自体を疑うことは極めて困難なことになる。人は物心のついたころから、家庭、学校、宗教施設等で言語によってさまざまなことが刷り込まれる。人間関係や社会規範から、人類の歴史や自然の成り立ち、そして死生観や天地創造まで、その社会で正当とされ流通する知識や価値観が刷り込まれるのである。そのような刷り込みこそ、「文化的ヘゲモニー」、あるいは、「同意による支配」を生み出し維持する主たる社会装置である。もちろんこのメカニズムについて論じられてこなかったわけではない。アントニオ・グラムシ（Antonio Gramsci）やミシェル・フーコー（Michel Foucault)、エドワード・W・サイード(Edward W. Said)等多くの研究者が、人間社会を論じるに際してその社会装置を鋭い観察力でもって分析してきた。しかしながら、彼らの提示する事例は、どちらかといえば体制とヘゲモニーに組み込まれる社会の構成員との従属的な関係性においてとらえていると考えられる。独裁的な権力に対してや、狂気や、人種の固定化に伴う「文化的ヘゲモニー」の機能を前景化しているのである。しかしこの「文化的ヘゲモニー」の機能は、権力者や一部のエリート層だけではなく、社会のマジョリティを構成する人々との共犯関係により維持・継承されているのではないだろうか。もしこの前提のもとで「文化的ヘゲモニー」の機能を認めるとするのなら、以下に述べることは存外無理なく納得されると思われる。

家庭、学校、宗教施設等において、言葉により知識や価値観が刷り込まれることは、必ずしも強制的に行われているのではない。それどころか、積極的に身につけ、実践しようとする学生や信者が多数存在する。なぜなら、刷り込まれた知識や価値観を人は「普遍的真理」と感じるようになるからである。したがって、「愛国教育」や「皇民化教育」を実施

---

[1] 本稿は、拙著『「反抗者」の肖像——イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成——』(渓水社、2013）の第3章1.5「日本語による東アジアのマッピング——(大)アジア主義」の補足として書いたものである。

する時代においても、「民主教育」や「平和教育」を実施する時代においても、各々の教育制度下で刷り込まれる内容が生徒／学生によって「普遍的真理」と信じ込まれるようになる。一方社会のほうも、従順に受け入れ、実践するものを善良な社会構成員として遇する。その社会が全体主義的であればあるほど、その傾向は強くなるだろう。今日においても、自己の保身のみの政治を行う独裁者を「崇めたてる」ような教育制度を維持する国家は依然として存在している。このように、社会による刷り込みを積極的に受け入れようとする者たち——および彼らの言動——を、本論では「反復者」と呼ぶことにする。一方、「反復者」の適性を欠く者、あるいはそれには収まりきらないような資質を持つ者、もしくは、「優秀な反復者」であることと現実の社会との軋轢を経験することによって、人は「反復者」からの「脱落者」になるか、もしくは積極的に「反復」から離脱し、「反抗者」へと移行する。

このような「反復者」を再生産する社会のメカニズム——同時に「脱落者」や「反抗者」という体制にとって望ましくない副産物が生まれるメカニズム——は、すべての社会が普遍的に共有するものである。そして単純な図式化を行えば、「優秀な反復者」は優等生として官僚などのエリート層を形成し体制を強化していき、それ以外の凡庸な「反復者」は一般の市民として社会を支えるとともに、知識や価値体系を貯蔵するプールを成している。一方「脱落者」と「反抗者」は、それが極端な場合にはアウトローや反体制者になるのである。「反抗者」のなかには対抗言説を生み出し、「体制」自体を変容させる可能性を有している場合もある。

植民地状況において、従属民の子弟が学校で支配者の「知識」や「価値観」を刷り込まれる場合であっても、最初は皆「優秀な反復者」になろうと頑張るのだと思われる。イギリスの植民地であったナイジェリアを舞台にしたジョイス・ケリー(Joyce Cary)の小説『ミスター・ジョンソン(*Mister Johnson*)』では、ミッション・スクールで教育を受けた無能な「反復者」であるジョンソンは、自分が大英帝国の模範的な「反復者」であると盲信するが、彼の「黒人性」——多分にこれは英語言説における「黒人性」である——のゆえに、結局は破滅するという話である。このように植民地状況下においても、教育は「反復者」を生産するのであるが、フランツ・ファノン（Frantz Fanon）がそうであったように、「優秀な反復者」であることと現実の社会との軋轢を経験することにより、「反抗者」が生まれることが顕著にみられる。

本論において、2 種類の「反復者」生産の形態を分析することによって、「反復者」概念——そして「反抗者」概念——が、社会やその「文化的ヘゲモニー」の様態を分析するためのツールとして有効であることを検証する。

2．大川周明の『新インド』の「理解」と「無理解」

チャールズ・グラント（Charles Grant）やT・B・マコーリー(T. B. Macaulay)ら「リベラル」派がインドにおける教育制度の実権を握ることにより、英語教育を受けたベンガル・バー

ブ―を生産する教育制度が作り上げられた。その教育内容は、満川亀太郎が皮肉を込めて指摘するように、[2] 科学技術教育よりは文化教育に重点が置かれた。おそらくイギリス人の支配者は文学や歴史を教えることによって多分にイデオロギー教育を課することを意図したものであったのであろうが、実際には、19 世紀以降の西欧の思想が英語による教育を通してインド人エリート階層に流れ込むことになった。そして、英語教育を受けた「優秀な反復者」であるインド人の間に、「国民国家」や「人権意識」の観念が芽生えてくるのであるが、イギリス本国では担保されている「優秀な反復者」に対する待遇が、英領インドにおいては保障されていない現実との齟齬に悩まされ、不満を抱くようになっていく。しかもインド人に対する英語教育制度の根拠になっている 1833 年 8 月 28 日に国王の承認を得たイギリス議会での決議の一文――「この領地で生まれたいかなる者、陛下の臣民であるどのような出生の者、そこに居住するいかなる者であっても、宗教・出生地・家系・肌の色、あるいはそのいずれかの理由だけで、東インド会社の下での地位、役職、そして雇用を得られないようなことがあってはならない」[3]――と、さらにヴィクトリア女王(インド皇帝)の Great Durbar(大謁見式)の「宣言」は、「優秀な反復者」に教育制度の理念が軽視されていると感じさせたであろう。さらに問題なのは、ポール・スコット(Paul Scott)の小説『ラジ 4 部作(*The Raj Quartet*)』のインド人ハリ・クマールによって体現されているように、イギリス本国と英領インドに存在するダブル・スタンダードである。インド人エリートは、イギリスの大学に留学経験を持つことにより、彼らが刷り込まれた近代的な社会制度を肌でイギリスで経験し、インドに戻って英領インドの社会制度の不条理さを痛感する。[4] そしてその結果、英領インドにおいて、植民地化の過程を通してその積極的な受容者の中から「反抗者」が生まれていくことになる。

次に、このインドにおける「優秀な反復者」／「反抗者」を生み出すメカニズムの亜種ともいうべき試みについて検討してみよう。それは、大川周明の「アジア解放」の言説を反復・増殖しようとする試みである。

大川は、ふとしたことでヘンリー・コットン(Sir Henry Cotton)著『新インド(*New India or India in Transition*)』を神田の古本屋で購入する。そして彼は、コットンの本から「深刻鮮明にインドの現実」を読み取ったという。(大川は特に言及していないが、『新インド』が邦訳された記録がないので、彼が読んだのは原書であったのであろう。)

この時に至るまで、予は現在のインドに就て、殆ど何事も知らなかった。[5] インド思想の

---

[2] 満川亀太郎、『奪はれたる亜細亜』、広文堂書店、1921、p. 178。

[3] Syed Mahmood, *A History of English Education in India* (Delhi: Idarah-I Adabiyat Delli, 1895, rpt., 1981), p. 49.

[4] このことは、日本の植民地であった台湾からの内地留学生にも当てはまることである。

[5] たまたま大川周明が同時代のインドの現状を知らなかっただけではなく、当時の日本人の多くが関心を持っていなかったことは、次の満川亀太郎の『奪はれたる亜細亜』の引用からわかるであろう。「此の如き二個の連鎖に依りて日印間の關係は決して輕視す可らざるものあり、否我國民は盆々印度の事情を研究調査して、一は友邦との盟約に副ふべく、一は貿易の増進に由り

> 荘厳に景仰し、未だ見ぬ雪山の雄渾を思慕しつつ、娑羅門鍛錬の道場、仏陀降誕の聖地としてのみ、予は脳裏にインドを描いて居た。然るにコットンの著は、真摯飾らざる筆致を以て、偽る可からざる事実に拠り、深刻鮮明にインドの現実を予の眼前に提示した。この時初めて予は英国治下のインドの悲惨を見、インドに於ける英国の不義を見た。予は現実のインドに開眼して、わが脳裏のインドと、余りに天地懸隔せるに驚き、悲しみ、而して憤った。予はコットンの書を読み終えたる後、図書館の書庫を渉って、インドに関する著書を貪り読んだ。読み行くうちに、単りインドのみならず、茫々たるアジア大陸、処として白人の蹂躙に委せざるなく、民として彼等の奴隷たらざるなきを知了した。[6]

大川は、コットンの著作から「単りインドのみならず、茫々たるアジア大陸、処として白人の蹂躙に委せざるなく、民として彼等の奴隷たらざるなきを知了」することにより、「図書館の書庫を渉って、インドに関する著書」――西欧語で書かれた文献[7]――を調査研究することにより、西欧列強に蹂躙されるユーラシア大陸の諸民族を網羅的に『復興亜細亜の諸問題』で描いたのである。では、大川に「現代のインド」を開眼させたヘンリー・コットンとは、いかなる人物なのであろうか。大川は、コットンに関して序文で触れる以外に言及していない。

ヘンリー・コットンは、22 才でインド高等文官(Indian Civil Service)として英領インドで従事し、アッサムのチーフ・コミッショナーにまでなった人物である。彼の曽祖父も 18 世紀中葉に東インド会社で職を得て、東インド会社の理事を長らく務めた。それ以降コットン家は、インドの独立まで 5 代にわたって大英帝国のインド支配を支えた家系である。コットンは『新インド』において、インドの植民地政策、特にマコーリーの教育政策の全面的な支持を表明している。その上で、何故にインド人の不満が今日までに醸成されてきたのかという問題について考察しているのである。インド人の不満の原因して、アングロ・インディアンが自分たちの閉鎖的な社会に閉じこもり、インド人に対して偏見や蔑視を持って扱っていること、もともと綿織物などインドの手工業はイギリスよりも優れていたにもかかわらず、インド製品に対して不当な関税を課しイギリスの産業を保護する間に、産業革命を達成し、安価な原材料でもって大量生産した生産物をインドで売りさばくことによりインドの産業を壊滅状態にし、貧困層を増大させたこと、英語教育を受けたインド人を行政職や司法職に就くことを制限していることを挙げている。そして、現状のインド人の不満がより深刻な問題に発展しないための改善策として、インドに新たな産業を興すため

て日印兩者の親密を期せねばならぬに拘らず、我國に於て見るべき機關としては大隈侯爵を會長とせる唯一の日印協會あるのみ――而して其機關雜誌たる會報は會員外たる吾人が見たいと思つても、帝國圖書館にすら備付が無い有様である――書物としては十年前外務省にて編纂せし『印度事情』と最近出版せられし佐野甚之助氏の『印度及印度人』との二册を除いて一般事情を知ることが出來ない程の憐れなる状態である。」『奪はれたる亜細亜』、pp. 189-90。

[6] 大川周明、『復興亜細亜の諸問題』、中央公論社、1993、p. 18。

[7] 『復興亜細亜の諸問題』には、英語、ドイツ語、そしてフランス語文献がいくつか挙げられている。

の支援や、英語教育を受けたインド人を行政職――司法職については、時期尚早という――に積極的に登用すること、インド人の地元の有力者をその地域の諮問機関に参加させ、彼らの意見を地方行政に反映させる[8]というような、インド人の不満を解消させることが必要だという。繰り返しになるが、コットンはイギリスのインド統治政策自体は正しいという考えであり、その教育政策によってばらばらであったインド亜大陸の様々な言語、習俗、宗教を持つ民族の集合体に確固とした"a national organisation"[9]を与えたのであり、当面の問題が解消されれば、「新インド」、つまり、"the United States of India"[10]がインド亜大陸の地に現出するというのである。

コットンは、カーゾン(George Nathaniel Curzon)インド総督のベンガル分割やチベット侵攻に反対し、また、インド人の裁判官に白人を裁くことを可能にするイルバート法 (Ilbert Bill) に賛成し、インド国民会議のために尽力した人物で、「インド人の理解者」といえるであろう。しかしながら、彼はあくまでもインドの植民地政策を支持していたのであるから、西欧列強のアジアの植民地政策を糾弾し、のちに「大東亜共栄圏」における日本の代表的なオピニオン・リーダになっていく大川が、コットンの書に対してどうして「真摯飾らざる筆致を以て、偽る可からざる事実に拠り、深刻鮮明にインドの現実を予の眼前に提示した」と絶賛したのであろうか。確かにコットンは、英領インドの英語による教育制度における「優秀な反復者」でありながら植民地状況下にあって主流から締め出されることがインド人の不満の主要因とし、「優秀な反復者」を締め出しているアングロ・インディアン社会や、保守的で強硬な政策を行うカーゾン総督を糾弾している。しかしながら英語による教育政策はインドの植民地政策のコアであり、それを支持するコットンを、アジア解放を主張する大川が称賛しているのだ。大川はそのことを認識していたのであろうか。もしかすると大川は、コットンのアングロ・インディアン批判の部分だけを都合よく利用したのかもしれない。しかしそうだとすると、彼の筆致はあまりにも素直である。また、初版から 17 年をおいて出版された『復興亜細亜の諸問題』の再版の際に多少は修正してもよさそうである。[11]

3.「反復者」再生産の亜種について

ここで、インド植民地における「反復者」の再生産のメカニズムとしての英語教育と、それに関する大川周明の理解について考えてみよう。

さて日露戦争によって鼓舞せられたる、インド国民運動の中心は、英領インドに於て教

---

[8] 20 世紀になると、オリエンタリストとは別の意味で、「リベラル」派も東洋の伝統に対してある程度の寛容さを見せるようになってくる。

[9] Henry Cotton, *New India or India in Transition* (London: Kegan Paul, 1907, rpt. Bibliobazaar), p. 3.

[10] *New India or India in Transition*, p. 242.

[11] 1922 年（大正 11 年）に『復興亜細亜の諸問題』は出版され、大川によるとほとんど世間から注目されることはなかったが、明治書房高村有一に熱心に要請されて、1939 年(昭和 14 年)に再版を出版した。

育最も普及せるベンゴール[ベンガル]州であった。年少気鋭のベンゴール青年は、屡々集会を催して、熾んにインド独立を演説した。ここに於て時の総督カーゾン卿は、東部ベンゴールに回教徒多きを利用し、以てインド人の勢力を牽制せんとし、ベンゴール州を東西両部に分割せんと画策した。[12]

大川は、西欧列強のロシアがアジアの新興国である日本に敗れたという歴史的事件がインド人の国民運動を「鼓舞」したと誇らしげに語る。その国民運動の中心は、「教育最も普及せるベンゴール[ベンガル]州」であるというが、その教育とは、まさにコットンが誇らしげにいうところのインドに確固とした"a national organisation"を与えた英語による教育のことである。つまり、インド人の中に国民運動を引き起こす下地を作ったのはイギリス人のもたらした教育制度であり、その国民運動を鼓舞したのが日露戦争における日本の勝利であったのだ。大川は、その国民運動をインド人自らの内発的な運動としてみなしていない。

もっとも、英語による教育制度を無批判に支持しているのではないのは、反体制的なインド人学生を大学から追放するインド政府に対して、インド人が自らの大学を創設しようとする運動を記す以下の引用に表れている。

・・・ベンゴール州有志は、国民教育会議を開き、全然政府より独立せる大学を創設し、純乎たる国民主義の下に哲学・科学・文学乃至工芸に関する教育を施さんと計画し、盛んに州内を遊説して熱心なる賛成を得た。この計画に於て最も注意すべき一事は、従来インド諸学校に於て、最も重要なる学科なりし英語を第二語学となし、これに代うるにベンゴール人にはベンゴール語及び梵語を、回教徒にはウルドゥ語・ペルシャ語及びアラビア語を以て第一語学たらしめんとせることであった。吾等はこの事に於て、最も明瞭にインドに於ける国民的自覚の正しく且強気を見る。[13]

この引用箇所で大川は、ベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)が『想像の共同体(*Imagined Communities*)』でいうポピュラー・ナショナリズムにおける言語の役割を先取りしているといえるのだろうか。ただここでも、正しい「国民的自覚」をインド人にもたらしたのがベンガル語やサンスクリット語であるとはいっていない。あくまでも、正しい「国民的自覚」に目覚めたインド人が「強気」に行う次のステップなのである。そこには、アジアの仲間としてのインドに対して、「内発性」をさほど評価していないように思われるのだ。そのことは、『復興亜細亜の諸問題』を書いた時期より20年以上経過し、「アジア解放」思想の旗手として時代の寵児になっていたころには、その意識はさらに後退したようにみえる。

---

12 『復興亜細亜の諸問題』、p. 83。
13 『復興亜細亜の諸問題』、pp. 84-5。

吾等は自由なる亜細亜を一個の家族に形成せねばならぬ。

而も心が一なる時、體もまた一たるを得る。故に亜細亜を一個の家族に組織するためには、亜細亜の精神を統一せねばならぬ。日本の裡に、また亜細亜の裡に、統一の意識を喚起することによつて、亜細亜的自覺を把握せねばならぬ。而して此の精神的統一は印度と支那とを抱擁せる日本の『三國』魂によつて既に實現されて居る。そは亜細亜が發見し、繼承したる至極の眞理である。この眞理は、亞細亞をして眞固に偉大ならしめ、有力ならしむるものであり、来るべき東亜細亜協同體は、この統一的意識の上に築き上げられるべき『三國』である。又は『三國』魂の客観化である。[14]

明治時代の日本をつぶさに観察したラドヤード・キプリング(Rudyard Kipling)とラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）は、一方は近代日本に「ハイブリッド」を見、他方は「模倣」を見た。[15]両者の見方には多少のずれはあるものの、日本が西欧を単純に「反復」しているのではないことを見抜いたのである。そのことは、夏目漱石も「現代日本の開化」と題する講演で述べたように、[16] 日本が内発的な近代化を行ったという意味ではない。あくまでも「模倣者」なのである。ところで、「反復者」と「模倣者」の違いとは、前者が知識ばかりではなく価値観（「価値の源泉」）をも刷り込まれるのに対して、後者のほうは、文化に深刻な影響を受けない科学技術のような知識の受容や、思想のような文化受容であっても表層レベルに制限する自由を有していることだ。そのため、急には文化のコアで混乱が生じることはない。それは日本が西欧列強の植民地にならなかったことが主たる要因であるが、結果として、ラビーンドラナート・タゴール(Rabindranath Tagore)のように植民者によって刷り込まれた「価値の源泉」との対決を通して「東と西」についての深い省察を行うことを、近代日本は先送りしてしまった。[17]大川の植民地インドへの開眼において、イギリスのインド人への英語教育による「反復者」の再生産に対して、『復興亜細亜の諸問題』ではインド人の主体の問題をある程度は意識していたにもかかわらず、『新亜細亜小論』においてはそのことを忘却し、西欧列強による政治的支配の問題だけを主張する。したがって、日本が「大東亜」から西欧列強を追い出して、「亜細亜を一個の家族に組織する」ことは、大英帝国の植民地政策批判と抵触することはない。つまり、英語による教育制度がインド人に「国民的自覚」をもたらしたことが是認されるように、日本による「抱擁」がインドや中国に「亜細亜的自覺」をもたらしたという意味で、「日本の裡に、また亜細亜の裡に、統一の意識を喚起することによつて、亜細亜的自覺を把握」し、「至極の眞理」を東アジア全体に広げることが日本の使命として意識される。しかしな

[14] 大川周明、『新亜細亜小論』、日本評論社，1944、p. 12。

[15] 拙著『「反抗者」の肖像――イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成――』の第２章 3.1「「日本の近代化」表象――キプリングとハーンの視点から」を参照。

[16] 夏目漱石、『漱石全集　第 14 巻　評論雑篇』、漱石全集刊行会、1929、pp. 272-3。

[17] 「われわれはわれわれの人間性によって、イギリス人の人間性を目覚めさせねばならない。それがただ一つの道なのである。」というようなタゴールの言葉は、日本人から発せられることはないのかもしれない。『タゴール著作集　第八巻　人生論・社会論集』、第三文明社、1981、p. 182。

がらそれはとりもなおさず、「模倣者」日本の「反復者」を拡大再生産するシステムを、「大東亜」に構築することである。

3．おわりに

「模倣者」日本の「反復者」を拡大再生産する「大東亜共栄圏」というシステム構築の夢は、アメリカによって見事に粉砕された。他方、戦後日本が「アメリカン・デモクラシー」の「優秀な反復者」になったのか、またぞろ「模倣者」であり続けているのかは本論のテーマではない。本論では、繰り返しになるが、「反復者」――及び「反抗者」――という概念が、社会やその「文化的ヘゲモニー」の様態を分析するための有効なツールになりえるかを検証することであった。そして、英領インドの従属民であるインド人の理解者であるヘンリー・コットンが、「反復者」を拡大再生産する制度を依然として支持しており、コットンの著書に出会って「現在のインド」に開眼したはずの大川周明も、「反復者」再生産＝植民地政策という英領インドの問題を忘却してしまうのである。

本論ではコットンの英語による教育制度の支持や大川の「忘却」について論じたが、これは単に彼らだけの問題ではない。そもそも「体制」というものは、それ以前の体制を否定しつつ現在の体制を堅固にし、拡大させていくための資源として、「反復者」を拡大再生産していくものなのである。そして「優秀な反復者」はエリートの地位を与えられる。しかしながら、再生産が進行する中で、単に反復だけではなく、知識や価値観のち密化が起こるものの、当初は活力があった社会システムも、その枠をそのドミナントな構成員である「従順な反復者」が乗り越えたり覆すことは決してないために、やがて社会は硬化してゆき、様々な矛盾となって現れる。このことは単に社会制度にとどまらず、宗教や学問などすべての領域に当てはまる。たとえば、東洋文化を研究するオリエンタリストは、いかにその知識が精緻化されようとも、西洋の東洋に向けられた眼差しを変えることはない。その閉塞を打破するために「反抗者」が生まれてくるということになる。そして「反復者」と「反抗者」の抗争を経て新たな体制が誕生し、社会やそのさまざまな諸相を活性化させるのである。しかしながら、権力を握ったかつての「反抗者」がまず最初にやる政策は、自らの「反復者」を再生産するシステムを作り上げることである。これが、いかなる時代、いかなる社会においても共通する社会のメカニズムでもある。